

Prince's tour. In 1937, it relocated to its current site in Zhongshan District.

The school featured more Japanese language classes than other girls' schools, making tanka composition a required subject to hone students' language skills for mastering "proper Japanese". Under its second principal, Masao Ono 小野正雄 (1884–1976, from Kurashiki 倉敷, tenure: 1925–1941), tanka education expanded beyond the curriculum to become a school-wide event. Students continuously submitted poems to prestigious imperial and shrine poetry dedications such as the "Imperial New Year Poetry Gathering 歌会始", "Meiji Shrine Poetry Dedication Festival 明治神宮献詠祭", "Atsuta Shrine Poetry Offering Ceremony 熱田神宮献詠祭", and "Yasukuni Shrine Poetry Offering Ceremony 靖国神社献詠祭". These prestigious poetry offerings hosted by the Imperial Court and state shrines in the mainland, achieving numerous selections.

The alumni magazine *Fuso* 『扶桑』 (founded in 1924) particularly showcased these achievements, featuring numerous short-form literary works including poems by current students, supplementary course students, graduates, and even faculty members. Alongside poems composed for school events and external tanka competitions, it notably featured works deeply connected to the school's educational philosophy, such as "Graduation and Entrance Ceremonies", "Educational Ideals", and "School Trips", "Physical and Mental Training", and "Daily Scenes". It also captured wartime scenes through the eyes of these young girls, making it a valuable historical document. This paper introduces approximately 900 poems published in the magazine between 1939 and 1943, as far as we can ascertain at this time.

Japanese language education in pre-war Japanese colonies was carried out by stripping local people of their own languages. It is an indisputable fact that tanka education at Taipei Third Girls' High School was part of this process. On the other hand, the girls' poems examined below suggest that, within this harsh premise, human interactions existed within the school's educational setting that cannot be fully encapsulated by the term "imperialization".

Keywords: Taiwanese women, "tanka", liberal arts education, Taipei Third Girls' High School, *Fuso*

Taipei Third Girls' High School and the Girls' Tanka

From Tanka Published in the Alumni Magazine *Fuso*

TOYODA, Noriko, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

Abstract

Published in Japan in the 1990s and generating significant attention, *The Taiwan Manyoshu* 『台湾万葉集』 (compiled by Kohō Banri 孤蓬万里:1926–1998) and its sequel represent a crystallization of short-poetry literary culture by Taiwan's Japanese-language generation. Many of the Taiwanese female poets contributing to these works were graduates of the higher girls' schools that existed throughout Taiwan during the Japanese era.

In regions under the colonial rule or control of the Empire of Japan, the creation of traditional literary forms like tanka and haiku was encouraged as a means to grasp the essence of Japanese culture, significantly influencing the self-formation of local people. Particularly in colonial Taiwan, those higher up in the hierarchy of Taiwanese society tended to embrace "Japanization (modernization)" more actively. For Taiwanese girls receiving a colonial-modern education under such circumstances, mastering the culture of Japan's "mainland" middle and upper classes, such as tanka and haiku, was considered essential "cultivation" for becoming a proper *Yamato nadeshiko* (大和撫子; "ideal Japanese woman").

The fact that Japanese short-poetry forms were cultivated as part of national language education in Japanese-ruled Taiwan has been noted in colonial education studies. However, many details regarding its specific nature and historical materials remain unclear.

This paper aims to uncover and document tanka poems recorded in historical materials related to Taipei Third Girls' High School 台北第三高等女学校, an institution that stands out in terms of scale, organizational structure, and the volume of extant historical records. Through this, it seeks to shed light on aspects of the school's educational practices.

The prestigious Taipei Third Girls' High School, predecessor to Taipei Municipal Zhongshan Girls' Senior High School 台北市立中山女子高級中學, the alma mater of Tsai Ing-wen 蔡英文, Taiwan's first female top leader, was established in 1897 during the Japanese colonial period as the "Taiwan Governor-General's Office National Language School First Affiliated School Girls' Branch" in Shilin 士林, Taipei, as an educational institution for Taiwanese women. After several transformations, it became the four-year "Taipei Prefectural Taipei Third Higher Girls' School" in 1922. That same year, the "Taiwan Education Ordinance 台灣教育令" encouraged "Japanese-Taiwanese coeducation", allowing Japanese students to enroll. The following year, 1923, it was designated as a "School for Imperial Inspection of Taiwanese Girls' Education" during the Crown

国のためいたつく勇士慰めて銃後のつとめ共に果たさむ
同 荒木幸子
同 林氏秀琴

一三頁 ◎四月兼題 遠山霞 卒業生

乙女子のものを思ひてこもること霞おもたき遠の山かな
江郭氏珍
春がすみ彼方の峯にたなびきておぼろに見ゆるこの朝かな
王氏明珠
さやかにみどりなしたる遠山にかすみたよふ美しさかな

眺むれば朝まだ早き遠山の峯ましろにぞかすみかゝれる
橋本ヨシエ

朝まだき飛び立つさぎのかげおぼろかすみそめたり遠の山々
同

ねぐらたつ鳥かげ見えてほの／＼とかすみかゝれる遠の山々
李氏小英

群島のねぐらさしゆくかげ見えておぼろにかすみ四方の山々
同

有明の月かげみゆる空遠くかすめる山の連りて見ゆ
黄氏宝玉

一面にこめし霞に掩はれてかげほかなる大屯の山
同
黄氏鶴治
朝ぼらけ窓をひらけば遠方にかすめる山の見えて美し
劉氏月清

〔続〕

【付記】

関連資料収集に際して台湾大学文学院中文系の高嘉謙教授にご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。

本稿の前言は、拙稿「台北第三高等女学校の『短歌』修養」(『日本台湾学会報』第二七号、二〇二五七月、一六三―一八六頁)に拠った。

本稿は、科研費基盤研究(C)21K0033「東アジア女性による日本語詩歌創作とその主体性に関する研究―台湾と朝鮮を中心に」ならびに台湾国家図書館・漢学研究中心「二〇二二―二〇二三年度外籍学人來台漢学研究奨助」による研究成果の一部である。

この世をばはなれて一人み佛に仕ふる人の姿清けし

同 高崎トク

父母の前に疲をやすめつゝ今日の遠足物語るかな

同 早川孝子

本堂のみ佛仰ぎ乙女らは真心こめて拜みにけり

同 陳氏雲霞

人の世に交らぬ人の尊さよ汗にまみれて皁つくらす

同 蘇氏玲善

若草のもゆる春野の花すみれ誰を待ちてや一人咲くらむ

補習科 黄氏玉鳳

春の日のうらゝにさせる山の上の蕃杜の子等のなつかしき哉

同 林氏雪子

里遠き深山にすみて学び子を育くむ人のいたつきおもふ

同 羅氏月銀

山深き里に育ちし童べの清き瞳よ永久にすめよかし

同 莊氏玉

山深きこの里わにも日の本の教への道ぞゆき届き居り

同 黄氏碧花

一三頁 ◎白衣の勇士慰問の歌

白妙の衣にぬへる十字章見つゝ思ひぬそのいさをしを 三年生 余氏秀惠

おのが傷多く語らぬますらをの広き心に頭さがりぬ 同 瀧澤百合子

白衣の人戦闘帽をかぶり来てコートに遊ぶひる下りかな

同 田中ふさ子

白妙の衣まとへるますらをを乙女やさしく慰むるなり

同 内藤照子

いたづける白衣の勇士慰めて心嬉しく家路につきぬ

同 張氏玉華

入城を前にたほれますらをの心はいかに口惜しかるらむ

同 中田艶子

童らも双六とりて慰めぬ病の床に憩ふ勇士を

同 張氏愛治

もう一度いくさのにはに立ちたしと勇む勇士の面の輝き

同 黎氏富美子

白妙に輝く姿仰ぎつゝ言の葉もなく頭下げけり

同 江氏素心

大陸に散りたる友の上語る白衣の人の目に涙あり

同 林氏舜英

支那兵の弾にあたりてはづかしと語るまぶたに露の光れる

同 今田栄子

国のためたほれし人はほゝえみぬ己がいたづきかへりみずして

同 邱氏玉蘭

いたで負ふ白衣の人を見送りとくいえませとつゝしみ祈る

同 許氏月裡

贈りたるダリヤのかげに幼子の写真飾れり白衣の人は

同 的場淳子

バス内に席をゆづればほゝえみし白衣の人のなつかしきかな

同 蘇氏玲善

国のためきつつきませしますらをの幸祈るなり国民みなは

同 早川孝子

国の為いたで負ひにしますらをの部屋をきよめて慰めにけり

同 李氏映雪

春の野に匂ふ花みな国のためいたで負ひにし人に捧げむ

同 李氏瓊雲

美しき花を勇士の枕辺に友と飾りて慰めまつる

同 前田春子

しろたへの衣まとへる兵を慰めむとて花飾るなり

同 陳氏月娥

窓ふきて花を飾ればいたづける白衣の人はほゝえみにけり

同 陳氏彩珠

国のためいたづく人の母となり慰めまつらむ女子みなは

同 李氏慰々

白妙の衣の胸の十字章春の光に輝きて居り

同 呂氏春香

白雪を頂く富士の萬代に聳ゆるさまの美しきかな
九重の大広前にまのあたり現御神を拜むかしこさ
新宿の御苑の桜道もせに散れるめでたさふむ心地せず
浦ちかく友とよりそひ眺むれば夕日に映ゆる夫婦岩かな

同 陳氏満
同 范氏秀鳳
同 洪氏鴛鴦

朝霧の薄れ初めゆく湖の面の遥か彼方に丸木舟見ゆ
のぼり来て山峡の里眺むれば山桜花霧に煙れり
夕霧は静けく深山をとざし来てほのかになりぬ白樺の影

同 林氏綏美
同 山本静子
同 小竹みどり

空青く風静かなる旗の日に富士の高ねのいと白く見ゆ
憧れの吉野の山に来て見れば桜の蕾未だかたかりし
樞原の大広前にぬかづきて祈り捧げし我等乙女子
み吉野の古き宮居の跡とへば昔のことの偲はるゝかな
春浅き中禅寺湖の岸邊にて残んの雪を投げて遊べる
海原に夕日輝く頃なれば去りゆく波に故郷を想ふ
あこがれの吉野の山に来て見れば桜は咲かず春雨ぞ降る
名もゆかしき奈良の都をたづねきて古の事思ひ出づるも
波間にも碎けて光る月影のさやかに照らす甲板の上
すみ渡る春のみ空に聳えたつましるゝ富士の嶺のけだかさ

同 高氏清梅
同 鄭氏緞妹
同 李氏八妹
同 古氏桜嬌
同 陳氏玉瓊
同 廖氏素芬
同 呂氏金蓮
同 吳氏市娥
同 余氏月娥
同 王氏宝彩
同 寺沢静江

美しく匂ふ桜を故郷の老いたる母にみせたと思ふ
湖の面にひゞける杵歌の調聴きいる旅の乙女ら
静かなる里わにひゞく杵唄の調珍し日月潭の旅
黄昏の湖の面にさびしげに丸木舟一つ浮きつ沈みつ
麗なる春の光の輝きぬ鏡の如き湖の面に
ふか／＼と澄みたる湖面を銀色のしづきをあげて船進みゆく
瑞竹を伏し拜みて日の皇子のいでまし給ひし時偲ぶかな
支那鈴を首につるして荷を運ぶ牛の姿のほゝゑましもよ
年々に生ひ茂りゆく瑞竹を仰ぎて偲ぶ御代の栄を

同 劉氏梅英
同 林氏鳳
同 的場綾子
同 黃氏罔市

一二頁 ◎中南部旅行の旅

旅の子の行く山路に春雨の惜しくも散らす桜花かな

人住まぬ深山の奥につくましく咲き匂ふかなしやくなげの花

四年生 林氏宝月
同 林氏桂子

神さびし深山の奥の神木になにか知らねど頭垂れたり

同 羅氏貞仁

一二―一三頁 ◎春季旅行の歌

大空に雲一つなく晴れ渡る遠足の日の心地よさかな
落ち来る汗のしづくをふきながら勇みて登る仙公の廟
頂にたどりつきたるうれしさよ友と楽しく笑ひ語るも
日盛りの真昼のやすみに水筒をのみにし時の水をつめたさ

二年生 陳氏芳蘭
同 何氏淑花
同 劉氏敏

遠足のたのしきさまを故郷へ書きて知らする夕静けき
長閑なる春の野道を眺めつゝ友と語らふ楽しき旅かな

同 陳氏百合
同 許氏錦鵲
同 李氏鑾

師の君の優しの言葉今更に強く身にしむこの日頃かな
同 張氏秀蓮
鎌とりて刈りて秣にしあげたることもありけり庭の思ひ出

巢立つ日の近くせまれば師の君の誠こもれる教身にしむ
同 陳氏荷珠
四年の春もいつしか過ぎ行きて巢立たん春を迎ふる詫しき
同 黃氏玉叙

師の君のみなさけふかきみ教を固くまもりて永久に忘れじ
同 劉氏月清
四年の業をば終へて送られて巢だちゆく身と今はなりにけり

同 邱氏金鳳
四年の業をば終へて送られて巢だちゆく身と今はなりにけり

同 蔡氏月嬌
明け暮れに机ならべし友垣と別るゝ時の早も来にけり
同 林氏曉

師の君のみ惠深きみ教ぞ巢立たむ後の永久の御守
同 官氏錦裡
懐しきわが師の君よ学び舎よ幾春かけていやさかえませ

師の君の教守らば五百重なる世の荒波もいかで恐れむ
同 林氏菊子
師の君の四年の教身にうけて巢だちゆく日ぞ嬉しかりける

同 李氏水恙
師の君の四年の教身にうけて巢だちゆく日ぞ嬉しかりける

同 陳氏綉鸞
師の君の幸多かれと祈るなり学びの園を巢だちゆく日に

同 黃氏紫桂
四つの年夢とうちすぎ早くに巢だつ乙女の心悲しき
同 徐氏賽蓮

同 傅氏明珠
懐かしの友と語ればはてもなし語りつくさぬ事多くして
師の君の誠あふるゝみ教えにそひてゆかなむ巢立ちて後も
同 林氏苑玉

小夜ふけて一人窓べに月見れば過ぎし四年ぞ偲はれにける

同 佐藤惠美子
時折の文な忘れそわが友よ幾山河に身は隔つとも
同 陳氏美蓮

学び舎の庭は出づとも師の君の尊きみ教とはに忘れじ
同 葉氏娘得
四つ年もむつみし友と窓のべに後の便りを誓ふさびしき
同 林氏腰

懐かしき学びの園を巢だちゆく名残ぞをしきこの日頃哉

同 蘇氏月雲
数々の忘れかねたる思ひ出を包みて今ぞ友と別るゝ
同 山口ヒロ子

一一頁 ◎内地に旅して

静かなる五十鈴の川のせゝらぎに遠き神代の偲ばるゝ哉

四年生 楊氏鈴子
神さびし伊勢の社にぬかつきて遠つ御祖の御業しのびつ
同 陳氏秋蓮

同 林氏美玉
富士の山真白き雲を頂きて青空高く聳ゆるを見る
同 吳氏杏仙

同 邱氏桜梅
あこがれの神戸の港見え初むと船のデッキに皆つどひけり
同 邱氏桜梅

兵のみ魂しづまるみ社に詣でて我はかしこさに泣く(靖国神社)
同 林氏鶴仙
都にて我が大君の行幸をわれかしこみてをろがみにけり
同 邱氏金菊

同 簡氏春梅
静かなる富士を浮かべし蘆の湖に春陽のどかに輝き居れり
同 林氏玉英

同 王氏阿嬌
煎餅はしと道を行きかふ旅人の袂にすがる春陽野の鹿
うららなるのどけき春の嵐山風そよ吹きて散る桜花

四年生 李氏如月
皇君の御陵威あまねき大御代をことほぎまつる一億の民

同 陳氏碧棠
日の本に生れし幸を万民とはに伝へて君にこたへむ
同 張氏秀文
双びなき今日の佳き日を寿きて生けるしを思う民草
同 林氏初枝
栄えゆく御代万歳と万民神酒酌みかはし祝ひつるかな
同 吉嶺ミヤ

一三頁「歌壇」◎奉祝登山

登り来て進まぬ足もいたゞきを遥かに仰ぎ元氣湧くかな 一年 高氏菜
いたゞきに辿り着きたる乙女子のさけぶ万歳勇しき哉 同 洪氏安乃
山の上に我は祈らむすめ国の永久の栄とつはものゝ上を二年 徐氏端妹
珍しきあかきもみぢ葉近影の山路に見えぬ登り登れば 同 邱氏秀卿
友垣とたすけあひつゝ登るかなけはしく高き大屯の山 同 郭氏千晶
敷島の国に生まれしよろこびを大屯の嶺にけふぞほぎあふ 同 呉氏淑貞
木の間より吹く風寒み深山路をつはもの偲び友とふみよむ

四年 張氏碧蓮
紅の山ぞしのばゆ常夏の島の山並もみぢまばらに 同 蔣氏梨雲

一三頁「歌壇」◎二月兼題 日本国(ひのものとくに) 卒業生

輝ける年を寿ぎ日の御旗戸毎ひらめくひのものと国

盧林氏佩蘭
大御陵威光あまねき大御代に彌もさかゆく日の本の国 同
いにしへの神の御勅をそのまゝに彌栄えゆく日の本の国

黄氏端瑛
四方の国すさべる中に雄々しくもさきくのびゆく日の本の国

同
かし原の松のみどりもいや深くみ栄えゆくか日の本の国
大内ヨシエ
かし原の神の心をこしへに守りゆくなり日の本つ国
李氏小英
千早ぶる神代ながらの正道ゆく我が日本は栄えゆくなり 同

五六号(昭和一五年/一九四〇年五月二〇日)

一〇頁「詞藻」◎卒業にのぞみて

数々の思ひ出多き学び舎に別れゆく日の迫る淋しさ
元四年生 盧氏美蓮
師の君の厚き恵みに育まれ業をば終ふる今日の嬉しき 同 李氏勤
師の君の教守りて行く末の荒き波風のりこえゆかむ 同 王氏連璧
学び舎にこもりし頃は世の中のあだ浪しらで過ししものを 同 楊氏啓行

暮せまる学びの闇を眺むればすぎし四年ぞなつかしまるゝ

同 詹氏宝雲
学び舎を去りての後も友垣に幸多かれと祈る今日哉 同 陳氏月鳳
師の君の教守りていざ立たむ荒るゝと聞ける浮世の旅に 同 廖氏宝玉
さ緑の学びの庭に友垣と語りし事の思ひ出さるゝ 同 廖氏玉燕
師の君の篤きみ諭身にしまて雄々しくいでむ波高き世に 同 林氏華珠

二頁「詞藻」◎感想 皇紀二千六百年を迎へて

ほがらかに岩戸の光もるゝとゆたかに明くる御代の春かな

補習科 川島喜久子

一三頁「歌壇」◎迎年祈世 勅題詠進歌(抄)

あめ土を治め給へる神々に年を迎へて世を祈るかな 一年生 古澤澄子
さしのぼる初日をがみて祈るかな今年の聖代も幸多かれと

同 郭氏瓊瑤

たか光る初日拜み皇国のとはの栄を祈るわれかな 同 蘇氏淑英

しろしめす皇御国の彌栄え祈るなりけり年を迎へて

二年生 陳氏玉雲

新しき年を祝ひて翻る御旗仰ぎて御代祈るなり 同 林氏翠珠

新しき春を迎へてすめらぎの御代の御栄祈りまつれり 同 黄氏桃

新玉の年を迎へて祈るかなすめら御親の御代やすかれと

三年生 寺村静江

治まれる御皇国のいやさかを年を迎へてわれ祈りけり 同 湯氏鳳嬌

みいくさの四年の春の初まうで国の栄を祈るわれかな 同 林氏敬子

あし原の国安かれと祈るかな初日の映ゆる宮に詣でゝ 同 邱氏■梅

戦にあけて迎ふる大御代の初日をろがみさかえ祈るも

四年生 陳氏見梅

新玉の年を迎へて大前にぬかづき祈る御代の栄を 同 許貴美子

初日かけさやかにほゆるみ社にすめら御国の幸祈るかな 同 徐氏月珍

かちいくさ誉の年を寿ぎて初の詣でに世を祈るかな 同 黄氏宝玉

初日さす宮の御鈴を打ちふりて君が御代をば祈る今朝哉

補習科 川島喜久子

新玉の年の初日を拜みて御代の栄を我は祈らむ

さし昇る初日の光拜みて国の栄を尚祈るかな

初春を迎へ寿ぎ神垣に神代ながらの世を祈るかな

大君の御陵威の如く輝ける初日拜み祈る君が代

同 吳氏蓮々

一三頁「歌壇」◎萬民祝奉祝詠進歌(抄)

神代よりゆるがぬ国に生まれきて栄ある今日を祝う嬉しさ

一年生 辜氏碧玉

ゆるぎなきこの日の本に生れきて永久に栄行くみ代をほぐかな

同 徐氏青絹

日の本に我生れ来て限りなくさかゆる御代を祝ふうれしさ

同 邱氏淑瑛

輝かしき年を迎へて寿ぎぬ老も若きも幼き子らも

二年生 蔡氏翠雲

皇孫の下り給ひし高千穂を仰ぎて祝ふ一億の民

同 趙氏敏

輝かしき興亜の意気に燃ゆるかなひと心に佳き日祝へば

同 廖氏華英

よろづ民一つ心にすめらぎの治め給へる国祝ふなり

同 李氏明女

高砂の島人あげて祝うかなわが日の本の国の栄を

三年生 許氏玉

樞原の御祖のたてし日の本の栄ある年をこぞりて祝う

同 林氏登美

限りなき喜こめて万民一つ心に国祝ふかな

同 鄭氏緞妹

神さびし宮に集ひて万民佳き年を祝ふこの朝かな

同 陳氏玉瓊

すめらぎの千代に八千代のみ栄を祝ひまつらむ千万の民

四年生 李氏綱

諸共に火筒のひびき歌ひつゝ戦の場に友送るかな

同 李氏彩娥

みとりする人はかはれど変わらぬは君がやさしの誠心にこそ

同 王氏素琴

国の為いたでに悩む兵士の優しき母と友はなるらむ

同 張氏玉卿

いたづきにいたでに悩む兵のみとりに出で征く大和撫子

補習科 吳氏蓮々

白妙の衣まとひてひたすらにみとりなすらむ姿しのばる

同 文氏芳美

国のため異郷の空に雄々しくも兵みとる姿けだかし

同 三原登美枝

きよらなる心をもちていたづきし兵みとるをみな雄々しき

同 吳氏紅絹

一頁「歌壇」◎十一月兼題 夏の夜 卒業生

常臥しの目さめがちなる短か夜は露路の人声いつまでも聞ゆ

曾劉氏阿月

盆踊りどよめき絶えて更け渡る街の真上に天の河白し

同

今日の業終へて涼める人々の浴衣姿も軽やかに見ゆ

鄭氏明珠

小夜更けて頬吹く風の涼しさよ夏草の上に夜露光りて

同

おさらひもよそに眠りし妹の頬をかすめて吹く夜風かな

元初江

宵闇の迫りて庭の夕顔の一入白く目に映るかな

同

四頁 新年勅題 和歌披講会 披露和歌生徒選歌

新年を迎へて我は祈るかな輝く御代に幸多かれど

一年 李氏憐々

新たな年を迎へて大御代の栄をとほに祈る諸人

同 黒岩セイ

新しき年を迎へてみ社に我は祈りぬ御代のさかえを

同 葉氏文淑

初詣つめたき氷に身をきよめ御代のみ栄祈る我かな

同 陳氏雪娥

新しき年を迎へて祈るかなちみいくさに栄えゆく世を

二年 蕭氏碧霞

大君の千代の栄を祈るかな風ものどけき春を迎へて

同 今田栄子

新玉の年たちかへるみ社にぬかつきにけり御代を祈りて

同 羅氏桂英

あか／＼とかり火もゆる新年の宮に詣で／＼御代祈る哉

同 許氏桂

荒波のしづまりゆくを御社に詣で／＼祈る年の始めに

三年 范氏節子

くだかけの声も清らに年あけて御代の栄を祈る朝かな

同 小島澄子

新玉の年を迎へて神垣に去年（こぞ）よりまさる世を祈るかな

同 高氏清梅

老松の縁かはらぬ御社に大み代祈るにひとしの朝

同 雷氏純々

新年の朝さやけくあけゆけば神代ながらの世を祈るかな

四年 施氏素筠

新玉の年を迎へて祈るかな治まる御代の千代の栄を

同 陳氏美蓮

初詣国の内との安らけき御代なれかしと祈りけるかな

同 吳氏秀卿

しろしめす国安かれと祈るかな神代ながらの年を迎へて

補 李氏明珠

さしのぼる初日の影を拜（をろが）みて祈りまつりぬ御代のみ栄

卒業生 王鄭氏明珠

五五号（昭和十五年／一九四〇年二月二五日）

一一頁「歌壇」◎恩賜の額を拜して

感激にたぬ心を抑へつ御品(みしな)の前にわれはぬかく

一年生 渡邊とも

高砂の民に賜へるみなさを今ぞわれらは目のあたり見る

同 陳氏宝猜

かしこも皇太后のおんめぐみ恭さに涙おぼゆる

同 葉氏文淑

高砂の島人われらみめぐみもかしこきみ額仰ぐ今日かな

二年生 徐氏端妹

御額のみまえへにすゝみ拜す身の徳なき事に涙おぼゆる

同 江氏素心

学び子のまづしき業を幾歳月めでたまひける事ぞかしこき雪の上の御下賜のお品おほけなく拜みまつる今日の長さ

三年生 林氏綉美

大宮の御めぐみ深きたまものを拜みまつりて長さに泣く新高の山の麓の民草にたまひし品拜みまつれり

同 林氏碧蓮

み恵の刺繍の額を拜みてみ光のさす心地こそすれ例なきみ恵うけて乙女らはいよゝ励まむ学びの道に

四年生 張氏月英

大み旨しのびかしこみ少女らは笑ある今日を永久に忘れじ

同 張氏碧玉

高砂の島に生れし幸覚ゆみ恵深きみしな拜みて

補習科 柯氏環月

畏くもみ恵深き御下賜のみしなをおがむ今日の嬉しさ

同 林氏秀村

ためしなき此のおほせごとかしこみて島の諸人いかに答へん

同 川島喜久子

ためしなき大御恵を見に受けてかたじけなさに涙こぼるゝ

同 李氏明珠

大宮の下し給ひし御品をば島人とはに仰ぐ尊さ

同 文氏芳美

大宮の御下賜の額を拜すればかたじけなさに涙こぼるゝ

同 三原登美枝

高砂の島の学子我等いざ御旨に添ひて手枝すゝめん

同 吳氏紅絹

一一頁「歌壇」◎従軍看護婦を送る

日の本のをみなか譽身に浴びて戦の庭に今ぞ出で行く

一年生 蔣氏碧雲

大君のみいくさ人をみとらむと今ぞ出で立つ大和撫子

花のごと優しきをみな雄々しくも立ちたる様ぞ貴かりける

同 金桂樹

白き衣にやさしき笑みを湛へついで立つ君の勇ましき歳

同 林氏素娛

つはものゝ母となりてみどりなす真白き姿尊かりけり

二年生 蘇氏玉蘭

りゝしくもいくさの庭に花の如やさしく匂ふ白妙の君

同 廖氏華英

雄々しくも戦の場に出でたちし白衣の君に幸のあれかし

同 李氏明女

ますらをのみとりに今ぞ出でてゆく皇国の大和撫子

三年生 游氏秀蘭

いたづきのますらをの為身を捨てゝいくさのには出でし姉君

同 瀨川綱子

いたで負う兵達も温かき君がなさけにいえてゆくらむ

同 邱氏金菊

白糸の瀧をみ上げてたゞみぬ清き眺めに心うたれて
新高のみ山の奥は雨はれて梅の林に夕日かゞやく
新高の高嶺ゆはるか見おろせば姿おぼろにかすむ故郷

同 熊野素子
同 陳氏美蓮
同 梁氏秋英

一一頁「歌壇」軍艦明治神宮献詠歌(抄)

波寄する濱辺に立てば勇ましき軍艦の影ほの見ゆるかな

一年生 邱氏淑瑛

日の本に仇なす国を討たなむと波おしわけて進む軍艦
暁の大海原に堂々と進み行くかな我が軍艦
さしのぼる朝日に映ゆる軍艦大陸めざし進みゆくなり

同 井主和子
同 徐氏青絹

勇ましきかちどきあげて故郷の港に入りしみいくさの船
日に映えてみよしの菊のみしるしの輝きわたるみいくさの船

二年生 渡部みなみ
同 胡氏燕
同 高崎トク

いくさぶねみよしに菊の輝きて朝日に映ゆる姿雄々しき
すめらぎの御陵威輝く四方の海を今日も守りぬ戦のふね

三年生 鄭氏夢花

麗しき月の光に照らされて静かに進むいくさぶねかな
皇軍の御盾となりて波の上みいつを乗せて艦はゆくなり

同 林氏双霜
同 姚氏愛隣

勇しき兵乗せていくさぶねしまへ限なくまもり固むる
敵やぶる勲を夢にいくさぶねうみののみはり幾日すぎけむ

四年生 蘇氏秀蓮
同 張氏碧玉

朝やけに菊のみしるし輝きて進み行くかも海の浮城

同 吳氏淑真

わたつみに煙靡かせ雄々しくも皇国守る波の浮城

補習科 吳氏蓮々

荒波をけたてゝ進む軍艦のみよしの菊に朝日かゞやく
軍艦歡喜の声に送られて今日ぞいでゆく封鎖のつとめ
軍艦海原こえて日の本の光をよみに輝かすらむ

同 林氏秀村
同 川島喜久子
同 李氏明珠
同 文氏芳美

一一頁「歌壇」海邊巖 熱田神社献詠歌(抄)

荒波の騒ぐ海辺に悠揚と立てる巖の勇しきかな
おし寄せる波の大軍せきとめて血煙上げる海辺の巖
波よする二見ヶ浦の朝明けて巖の上に朝日さしそふ

一年生 陳氏百合
同 李氏明珠

白波の静かに寄するめのと岩しめなはゆひて神さびにけり
波よする海邊のほとり苔むせる巖の上を千鳥とびゆく
瀬戸の海静かに風ぎて磯の辺の朝日たださすいは美しき

二年生 山本ナナ子
同 洪喜美
同 張氏燕

なごやかに小波寄する海の辺の巖に月の清く照るかな
苔のむす海辺の巖に朝日さしあら波よせてまたかへるかな
照りそめし旭輝く巖かな静けき磯に雄雄しくたちて
夏すぎて船出を送るたらちねのわびしく立ちし海のべの巖
夕ばえをそびらにあびて磯がにの心々にはへる巖かな
磯の春さやかにあけてしぶきちる巖に朝日照りはゆるかな

三年生 呂氏鑾娥
同 駱氏珍珠
同 李氏阿燕
四年生 劉氏玉霞
同 李氏玉
同 吳氏淑真

(二) いたつきの吾子をみとれる母上の後姿に涙覚ゆる

四松 黄氏玉粧

(三) 大君の御楯となりし丈夫の御霊の前に我は額づく

一竹 黒岩セイ

(四) 君の為軍に出でし丈夫に感謝捧ぐる大和撫子

一松 陳氏巧

(五) 国の為いたで負ひたる丈夫の真白き姿有難きかな

四竹 林氏麗娟

(六) 国の為花と散りにし丈夫に花を捧げて祈る朝かな

三菊 潘氏素瓊

(七) 支那の民思ふにつけて日の本に生れし幸に涙こぼるゝ

二菊 陳氏含笑

(八) 天皇の国に生れし嬉しさをニース聞きつゝ語合ふ哉

二梅 嚴氏月娥

(九) 常ならば母に逆らふ我ながら遠くさり来てみ情に泣く

三梅 洪氏鴛鴦

(十) 和やかな日を過せるも幸に皇御民と生れ来てこそ

一梅 李氏満

(十一) 日に焼けし兵迎へ旗を握る手に限りなき感謝の籠る

三竹 洪氏中秋

(十二) 父母の優しき愛に護られつ学び舎に通ふ有難き哉

二松 陳氏玉雲

(十三) み軍の場に戦ふますらをの労苦偲べば涙こぼるゝ

二松 今田栄子

(十四) もろこしの民の生業聞く度に君が恵みに涙こぼるゝ

三松 郭陳氏幼

(十五) 靖国の神とまします丈夫の御霊よとはに安らけく在せ

補習 李氏明珠

(十六) 安らかに学びの庭にいそしむも皇御国の民なればこそ

四梅 蒋氏梨雲

一〇頁 旋の歌

古の我が学舎を仰ぎ見てパチナの昔偲びけるかな

一年生 蔡氏雪卿

紙つくる工場の様を珍しと驚き見入る我が姿かな

同 翁氏嬌

乙女等は疲れし身をもうち忘れ温泉(いでゆ)の中に踊り入るかな

同 吳氏麗貞

波寄する海邊の岩に友垣とむつみ語りて楽しかりけり

二年生 魏氏元環

美しき宮居の如き船を觀て開けし御代をありがたく思ふ

同 林氏勝玉

非常時と雖も一日安らかに旅に送りぬ学び子われら

同 陳氏菱英

白波の音せる濱を眺めつゝひろげいたたく汽車の一時

三年生 林氏敬子

雨けぶる中にともれる旅宿の灯なみさみしく夜ふけにけり

同 吳氏杏仙

山あひをあへぎ通りて汽車は今大海原を右手に眺むる

同 林氏錦綸

山の夜は静に更けてせゝらぎの音のみ高く聞え来るかな

補習科 文氏芳美

見下せば宵やみせまる奥山の谷間に淡く吊橋の浮く

同 林氏秀村

新高登山の歌

集ひよる友の姿もおぼろなり山里の夜は灯影淡くて

四年生 連氏妹

顔をめぐりて進む細徑の岩間に匂ふしやくなげの花

同 陳氏碧棠

同 黄氏玉釵

海に浮く島の如くに雲の面に並みたちてみゆ四方の山々 同 柯氏環月

さ緑の草にまじりて赤々と山の躑躅はいまさかりなり 同 林氏曉

湖のほとりに立ちて招く娘のおぼろげに見ゆさらば乙女子

同 劉氏戊妹

吹く風に葉ずれの音もさやかにて竹のみ園生しのぶ瑞竹 同 蔡氏月嬌

一三頁 ◎独唱会所感

外国に名を知られたる歌姫の君幸あれと我祈りけり 三年 湯氏鳳嬌

乙女子とまがふばかりによき声の三浦の君を永久に忘れじ

同 呉氏阿桃

心こめて歌ひたまへる師の君のお蝶夫人に涙ぐまるゝ 同 劉氏玉英

我を忘れたどひたすらにきゝほるゝ歌のよろしも神技にして

同 川波経子

調高く歌ふ三浦の師の君の青き着物に赤き袖口

同 李氏好款

美はしきその歌声にうつとりと耳傾けて聴き入りにけり

二年 施氏素芬

ものみなをいつくしみます御心にならひて我も身をば修めむ

同 陳氏蘇子

せんだんの若葉の下に思ひ出ぬ優しき清き師の君の声

同 陳氏梅妹

美はしく響きわたれる師の君のみ歌ききつゝみ栄祈る

同 陳氏名琴

鶯の如美はしき歌声を怪しみながらききにけるかな

同 郭氏瑞

一三頁 四月兼題「旧師を憶ふ」卒業生

六十を越えてみ教垂れ給ふ我が師の君の幸ぞ祈らる

江氏珍

夕されば匂ひ淋しき藤の花亡き師の君の姿しのばゆ

同 黄氏雪卿

友垣と集へる度に南の師の君のみ上語りあふなり

同

世に出でて事ある毎に師の君のみ教へ深く身にぞしむなる

同

折にふれさとし給ひし師の君のみ言葉深く胸に残れり

鄭氏明珠

星月夜しづかに憶ふ去にし日のわが師の君のやさしきみ姿

同

世の中に出でてつく／＼しのばるるみ情深き師の君の恩

金原利根子

とこしへに幸多かれと祈るなりみ教うけし師の君の上に

同

なにげなく習ひ過せし学びやの師のみ教へぞ今は尊き

橋本ヨシエ

世にいでていまだ浅きに師の君のみさとし強く偲ばるゝ哉

大内ヨシエ

師の君のあつきみ情身にshめて今日も励まむ我等が業に

李氏小英

五四号 (昭和一四年／一九三九年一月一〇日)

九頁 第五回重陽節供歌会 候補歌

(一) 暖き慈愛の籠る弁当をかばんに入れる時ぞ嬉しき 一菊 謝氏祝

巢立つ日の近くせまれば友垣と思ひ出話に今日も暮しつ

郭氏珠

一二頁 ◎内地に旅して

船出で、故郷の山のうすもやにかすみし春の暮の淋しさ

四年生 陳氏秀

五十鈴川清き流に身を清め心を清めをろがみにけり

同 潘氏煥妹

いにしへの神代の事ぞしのびける五十鈴の川の岸に立ちつゝ

同 洪氏珍児

五十鈴川清き流に群遊ぶ緋鯉真鯉の美しきかな

同 李氏祥杏

古の事をしのびてみ吉野の山たどりつつ涙流しぬ

同 邱氏金鳳

山深き吉野を訪れば古のことしのばれて涙流るゝ

同 吳氏秀英

山深き吉野の宿はしづかにて庭べに咲きし白梅の花

同 張氏秀文

咲匂ふ桜の花の下道を歩みし事の忘れぬかな

同 鄭氏梅桜

咲匂ふ桜の花を故郷のやさしき親に見せまほしきかな

同 廖氏春枝

降りつもる雪ふみわけて友垣と遊びし旅の宿の庭かな

同 陳氏足

ちら／＼と綿の如くに白雪の降りつむ様ぞ美しきかな

同 陳氏見梅

湖の岸の宿りは真白にぞ雪降る中に明けそめにける

同 林氏蕙芳

ひら／＼と袖ひるがへし踊子の舞狂ふさま美しきかな

同 黃氏祝

疲れたるからだ休めてくつろげる旅の宿こそうれしかりけれ

同 黃氏玩

旅たちて久しくあはぬ母上の事しのびける宿の夜半かな

同 余氏玉霞

山々に咲ける桜の厳島内外の人の集ふ春かな

元四年生 林氏嬌

小波に浮ぶ白帆もかすかにてあげぼの淡し春の宮島

同 邱氏春子

海越えて山幾千里旅立てば只思ひ出は故郷の母

同 蔡氏月雀

集ひ寄る鹿をうしろにうつしゑに興ぜし春の奈良の一時 同 林氏秀梅
地軸より涌き昇り立つ御神火の響きにしばし立ちすくみけり

同 郭氏珠

幾年か心にかけてし今日の日や神代しづけき神苑の杉

同 林氏秀村

吉野山散りにし人の墓とへば松風かほる苔の下むら

同 文氏芳美

萬年にそびゆる城のゆるぎなく緑いやます濠の老松

同 蘇氏淑招

真帆片帆白帆かすめてかもめ飛ぶ瀬戸の浦邊の春の夕風ぎ

同 潘氏美蓮

一三頁 ◎中南部旅の歌

深山路に咲き競ひたる桜花しばし止りて眺めけるかな 四年 林氏華珠

友垣とまろく集ひてなつかしき思ひ出語る旅の朝かな 同 曾氏香花

高砂の南の極の果までも茂りゆくかな大和言の葉 同 黃氏欽欽

静かなる里わにひゞく杵歌の調あはれにきゝいりにけり 同 李氏如月

そよ風に髪なびかせて山の子等鞭をふりつゝ牛おひてゆく 同 陳氏素梅

人見えぬ深山の奥につましくゆかしく咲ける石楠花の花

同 張氏玉卿

山の朝見上ぐる木々に霧こめて幽かに聞ゆ山鳥のこゑ

同 吉嶺ミヤ

憧れの桜の花はちりぬれど雲のさなかの山ぞうるはし

同 林氏潤貞

黒潮の躍る南の果までも御陵威輝く御代ぞうれしき

同 陳氏玉釵

青空に高く梢を仰ぎみて神木の名を讃ふるひとゝき

同 鄭氏鳳英

さま／＼山見おろして新高の高く聳ゆる姿けだかき

〔凡例〕

- ・ 本稿で紹介するのは、現在確認できる『扶桑』五三号～六一号、六三号～六六号の全一三号分に掲載された生徒による短歌のうち、五三～五六号までの掲載歌である。
- ・ 翻刻資料は、台湾図書館所蔵資料ならびに私蔵の第五八号に拠った。
- ・ 漢字の旧字体は新字体に改めた。ルビのある文字はその後ろに「」書きにして示した。
- ・ 翻刻に際して不明な文字は■で表した。

『扶桑』五三号（昭和十四年／一九三九年四月三〇日）

一一頁 ◎別れに臨みて 元四年生

学びをへ世に立つわれは師の君の教まもりてとはに進まん 川島喜久子
 いくとせか共に学びしわが友と袂をわかつ時ぞ来にける 潘氏美蓮
 高々とそびえて見ゆるまなびやを巢立ちゆく日の早も来にけり 顔氏玉
 師の君のつきみ教身にあれば世の荒波の何か恐れむ 蔡氏香提
 学びやの窓より見ゆる山々に別れを惜しむ頃となりけり 蘇氏淑招
 いつしかに四とせも過ぎて友がきと別るゝ時のはやも来にけり
 君のみをしへいだいき荒波の世にいざ立たむひな鳥の群 曾氏宝珠
 おもひ出のかず／＼ひめし学び舎に別れをつづる今日ぞ悲しき 蔡氏美德
 巢立ちゆく日の近づけば師の君にさとされし日ぞ懐しきかな 陳氏文子

学び舎を巢立ちゆく日の近づけば四歳のことぞ思いださるゝ 石氏玉英
 たそがれの学びの園に友垣とつどひ語りし日ぞなつかしき 坂井緑
 学び舎にひらめく旗を仰ぎ見ればすぎし四歳のなつかしきかな 黄氏新樓
 学び舎のうら庭の花そとなでゝ思はず胸の迫るこゝちす 翁氏眞
 なつかしく学びし四とせ思ひ出し去り行く今日ぞ淋しかりける 李氏素瓊

夢のごと四歳は過ぎてかず／＼の思はつきし学び舎の庭 吳氏茂子
 樂しげに友と語りし思出もわびしさのます日頃かな 張氏月娥
 たらちねの心に勝る師の君のみ教え深く思ふ今日かな 吳氏碧玉
 なつかしき学びの窓に立ち寄ればそよ吹く風も涙さそひぬ 江氏朝珠
 夢のごとめぐりし四歳かへりみて思はつきし学び舎の園 謝氏素英
 わが友と窓辺によりて淋しくも行く末語るこの頃の朝 大久保チエ子
 朝夕に遊び学びしこの庭もしばしの後に別れ行くかな 陳氏玉尾
 友垣と窓辺によりてしみ／＼と語れどつきめ此の日頃かな 八代道子
 師の君のみ教深く身にしまりて行く末ながく守り通さん 黃氏治雫
 四つ歳の庭のみ教とことばに守りて雄雄しく我はいで行く 陳氏玫玉
 去る年は姉を送れる我なれど今送らるる身となりけり 今村宣子
 しかられて涙おとしし文机も今となりてはなつかしきかな 吳氏蓮々
 師の君の深きみ教身につけて雄々しく出でむ荒波の世に 謝氏碧雲
 よつ歳の春めぐり来てなつかしの学び舎すだつ心わびしき 蔡氏月雀
 喜びもまたかなしみも共にせし友と別るる今日ぞかなしき 潘氏鶴
 学びやに別れをつづる時は来ぬ心淋しきこの日頃かな 邱氏梅子
 呂氏足

資料紹介 台北第三高等女学校と少女たちの短歌(一)

——同窓会誌『扶桑』掲載歌から

名城大学外国語学部 豊田周子

キーワード：台湾女性、教養、台北第三高等女学校、『扶桑』

戦後九〇年代に日本で刊行され、大きな話題を呼んだ孤蓬萬里(一九二六―一九九八)の編による『台湾万葉集』とその続編は台湾の日本語世代による短詩型文芸の結晶の一つと言える。ここに参加した台湾女性歌人は、日本時代に台湾各地にあつた高等女学校の卒業生が少なくない。

大日本帝国の植民地あるいは支配下に置かれた地域では、日本文化の真髄を体得し得るものとして短歌俳句など伝統文芸の創作が奨励され、現地の人々の自己形成に少なからぬ影響を与えた。とくに植民地台湾では、台湾人社会のヒエラルキーの上層部の人々ほど「日本化(近代化)」を積極的に取り入れる傾向があつた。そのような状況下に植民地の近代教育を受けた台湾の少女たちにとつて、短歌や俳句といった日本「内地」の中上流階級の文化を身に着けることは、立派な「大和撫子」となるうえで必要な「教養」だったのである。当時日本統治下の台湾で、国語教育の一環として日本語短詩型文芸の修養が行われた事実は、これまでも植民地教育学研究のなかで指摘されてきた。だがその具体的な様相や史料については不明な点が多い。

本稿は、修養の規模や組織性、また現存する史料という点において圧倒的な存在である「台北第三高等女学校」(以下、三高女)の関係史料に記載された短歌を掘り起こし記録することで、その修養の実態の一端を明らかにしようとするものである。

台湾初の女性トップリーダーである蔡英文氏の出身校「台北市立中山女

子高級中学」の前身にあたる名門三高女は、日本統治期の一八九七年に、台湾人女子の教育機関として「台湾総督府国語学校第一付属学校女子分教場」という名で台北の士林に開設された。その後、数度の変遷を経て、二二年に四年制の「台北州立台北第三高等女学校」となり、同年施行された「台湾教育令」の「日台共学」の奨励により日本人の入学も可能となった。翌二三年には皇太子が巡視行幸する「台湾女子教育状態御覧学校」に指定され、三七年に現中山区の新校舍へ移転した経歴を有する。

同校は国語の時間が他の女学校に比して多く、「立派な日本語」を身につけるうえで言葉を磨く訓練となる作歌が必須科目とされた。第二代校長の小野正雄(一八八四―一九七六、倉敷出身)の在職時期(一九二五―四二)に、その短歌教育はカリキュラムを超えて全学的行事となり、「歌会始」「明治神宮献詠祭」「熱田神宮献詠祭」「靖国神社献詠祭」といった宮中や官弊社が主宰する「内地」の格式高い献詠会・継続的詠進を行い、多くの入選を果たした。

わけてもその成果がまとまって見られるのが、在校生、補習科生、卒業生、さらには教員による歌まで数多くの短詩型文芸が掲載された同窓会誌『扶桑』(一九二四年創刊)であつた。そこには、学内行事や学外の短歌献詠祭に際して詠われた歌のほかに、「卒入学」「教育理念」「修学旅行」「心身鍛錬」「日常風景」といった同校の教育に深く関わる作歌が特徴的にみられ、少女たちの眼差しを通じた「戦時下の情景」も映し取られるなど、史料価値は高い。本稿では、現在確認し得る一九三九年から四三年の間に同誌に掲載された約九百首の歌を紹介したい。

戦前の日本の植民地における日本語教育は、在地の人々の言葉を奪う形で遂行された。三高女の短歌教育もその一環であつたことは紛れもない事実である。一方、以下に見る少女たちの歌からは、その過酷な前提の中で、「皇民化」という言葉だけでは集約しきれない人間の交わりが同校の教育現場にあつたことも窺われるであらう。